「唐代小説研究」（その二）

劉　開　榮著
西　岡　晴　彦訳

はじめに

本稿は〈文学部論叢第三号〉（S53・2熊本大学文学部発行）掲載の（その一）の続稿である。

「唐代小説研究」が出版されて、約四十年経ち、その間に唐代小説に関する専著が、日本・中国それぞれ刊行された。日本では、内山知也氏の「隋唐小説研究」（S52・木耳社刊）近藤春雄氏の「唐代小説の研究」（S55・笠間書院刊）がある。内山氏はその序文で「劉開栄氏の研究の欠けた部分を補う方向で、研究作業をつづけた」と述べられ、近藤氏もやはり序文で「劉開栄の『唐代小説研究』を見るに及んで、一層興味をかきたてられた」と記しておられる。中国では、祝秀俠氏の「唐代伝奇研究」（'57年中華文化出版刊）及、王夢鷗氏の「唐人小説研究」（一～四）（'78芸文印書館刊）（両者ともに台湾で出版）がある。この両者ともに随所に劉氏の著書の引用が見られる。このことはちょうど、魯迅の「中国小説史略」（'25北新書局）が出版後半世紀を経た今日も、中国小説研究の必読文献であると同じように、劉氏のこの著作は、唐代小説研究者にとって不可欠の要石の役割をもちつづけていることを示している。

この四十年間に、劉氏の提起した問題で克服され、改訂されたものも多いし、又その推定や論断を非とする意見も個別には存在する。しかし劉氏のこの著における方法そのものを批判し、凌駕するものはまだあらわれてはいない。

本訳稿では、劉氏の新版（'50上海商務印書館）との対照をおこない、また重要な問題については、劉氏以後の各著作の研究成果をも注の形で載せ、参考に供することとした。注は叙述の都合上、第一・二節と第三・四節をまとめてとりあつかうこととした。

第二章　伝奇小説の前期作品
――王度の古鏡記と無名氏の補江総白猿伝――

第一節　古鏡記の二つの特性と形式

古鏡記は、中国における本格的小説のもっとも早い作品であると云える。この作品には二つの特性があり、後の伝奇小説の発展と密接にかかわるので、ここに詳述することにした。

（一）　この作品は「古文」で書かれている。作者の王度（広記二三〇に「王度」と題してある。作者は小説の中で、著作郎を兼ね、天子の詔によって、国史を撰した、と言っている。また新唐書王績伝に、王績の兄の王凝が隋の著作郎で、隋書を編んだとあり、この王凝が王度と同一人物だということがわかる）(1)は、隋の古文運

動家文中子王通の弟であるから、彼が「古文」で小説を書いたのは不思議ではない。旧唐書一二一の王績伝(2)には「王通は隋末の大学者である。古代にならって六経を作り、また中説を作り、論語になぞらえたが、学者たちから歓迎されず、六経は有名にならず、中説だけがいま伝わっている」とある。隋の文帝が「古文」を提唱したことに関しては、本書の第一章ですでにくわしく述べた。王通はこの運動の中堅人物であった。この第一次の「古文」の提唱は、中唐の韓・柳の指導した「古文運動」にとって極めて大きな啓示と先導的作用をそなえていた。王度がここで、きわめて流麗な「古文」を用いて小説を書いたことは、唐代小説史の中で不滅の価値をもつと云える。勿論、六朝時代の小説の大多数は散文で書かれているが、このように純粋で、きちんと整い、美しい「古文」を小説を書くための表現手段として採用したのは、この作品がまさに最初であった。したがって古鏡記は伝奇小説史上、その第一頁を飾るにふさわしい作品と云える。

(二) 古鏡記の濃厚な道教的色彩は、前代を承け、後代をひらく作用を示している。六朝小説は干宝の搜神記のような鬼神怪異の話と漢武故事、漢武内伝（班固作とされる）のような宮廷での瑣事を扱ったものの二種類があり、とりわけ前者の方が多い。その内容は、古代神話、神仙方士の話から民間迷信に至るまでの話を一つの坩にいれて溶かしたもので、それは、道教的な色彩が濃密である。古鏡記をこの三者を混ぜあわせた作品であり、作中に一箇所「胡僧」がでてくるところがあるが、思想的にはいささかも、仏教の痕跡をのこしてはいない(3)。この特質（仏教的な思想）は後の伝奇小説の中で大へん重要な地位を占める。したがって古鏡記は依然として濃厚な六朝小説的色彩、換言すれば道教的色彩を帯びている。この点に関しては、作者の兄の王績の伝記を参照すれば、それが偶然でないことがわかるはずである。新唐書一二一の王績伝では

「王績、字は無功、絳州竜門の人、性格は明るく開放的で、他人に仕えるのを嫌った。……（兄の）王通は績が規則に縛られるのを嫌う性格を知っていたので、家業に関与させず、親族の冠婚葬祭の行事にも出席させなかった。大業（隋煬帝の年号）の頃、孝廉に挙げられたが、朝廷にあって楽しまず、志願して六合県の丞となった。酒ばかり飲んで、仕事はせず、天下が乱れるに及んで、弾劾されて解任された。（小説中と同じ）そこで故郷へ帰った。河渚の間（河北省）に十六頃の田をもっていた。その頃、仲長、子光なる者があり、ともに隠者として、妻子もなく北渚に廬を結び、薬草を栽培して自給し、周易、老子、荘子を牀頭におき、他の書はほとんど読まなかった（王績は彼等と仲好く近しくつきあった）(4)武徳（唐高祖の年号）のはじめ、以前の官職に見あった門下省の待詔官となった。酒を日に三升（約一・八リットル）給せられた。ある人が「待詔官は何が楽しみですか」とたずねると、「いゝ酒が恋しいね」と答えた。侍中の陳叔達がこれを聞き、日に一斗（約六リットル）づゝ給することになり、時の人に彼は斗酒学士と称せられた」とある。

又、晉書四九の劉伶伝には、

「(伶)は勝手気まゝな性格で、静かで寡黙、めったな交友はせず、阮籍、稽康と知りあって意気投合して林へ入った。……つねに鹿車に乗り、壺に酒をいれて携え、鍤を担いだ人夫をひきつれ、「死んだらそこに埋めろ」と云った」とある。

又、同書同巻の稽康伝には

「成長して、老荘を好み、……常に養性・服食の事を修め[5]琴を弾き、詩を詠じて自らの心を慰めていた。神仙となるには、自然にその気を稟けるのであり、学問によってなれるものではなく、養性の術を通じてその理法を得れば、安期・彭祖の如き人々[6]と同列に並びうると考え、「養生論」を著した」とある。

これらのいくつかの記載を参照しあうと、王績は魏晋の頃の竹林の七賢と似た道教的自然主義者であり、彼の黍を植え、酒を作り、田園生活を喜ぶ態度には、東晋の陶潛の遺風がみられる。したがって我々は、王度が道教的家庭の出身者であったと断定することができる。さらに旧唐書[7]一九〇の王勃伝を見れば、この推論を実証できよう。

「王勃、字は子安、絳州竜門の人、祖父の王通は隋の蜀郡司戸である。……勃は幼くして聡明、人を驚かせたが、ことに天文暦数の術に長じ「大唐千歳暦」を作り、唐の徳は千年の生命をもつと言った。……その論の大意は、『土を以って王となる者は、五十代で一千年、金の王は四十九代で九百年、木の王は三十代で八百年、水の王は二十代で六百年、……これが天地の定められた運命であって、暦の計算とぴたりと合う。黄帝から漢までは五行がすべて行きわたり、土運が再びめぐってきた。唐の徳がこれを承けたのは当然のことであった。その中間の晋魏～周隋は正統ではなく、五行の運行の力が衰えた時期である』」

算術、暦数、書法、医術は、従来すべて道教家庭に代々伝えられた家学であった。これは、魏晋南北朝史の各々の記載の中ではっきりと見出すことができる。「暦数」「天道」は古鏡記の中でも類似の論調が表現されている。たとえば、「鏡は横の径が八寸、把手は麒麟を伏せた形に作られ、把手のまわりには、四方に亀、竜、鳳、虎がならび、方位に向かって伏している。四方の外には八卦が作られ、その外には十二辰位が置かれ[8]、その上に馬の形が付いている。」又、「勃（績）は異人に会い、『周髀算経』九章と、『明堂六甲』[9]を授かった」（いずれも古鏡記本文）等々、である。だから古鏡記はまったく六朝志怪の余風を受けついだ作品であり、唐代の伝奇小説の神怪類のさきぶれとして極めて注目すべき作品なのである。

古鏡記は内容と性質が、昔を承け、後を啓く作用を具えている上に、作品の形式が特に六朝小説と唐伝奇小説の橋わたしの役割りを示している。唐以前の小説では、その書き方はもともと、たゞ直線的な随筆体で、一段落一箇条が、それぞれ無関連で、構成や組織に欠け、ちょうど編年史のようであった。古鏡記の形式も、一方では極めて濃厚な六朝小説的気配をもち、年月順に平板な叙述がなされている。大業七年五月から説き起こし、時間の先後に応じて、古鏡の霊験と怪異を述べ、中間で、大業八年四月一日、八月十五日、其の年の冬、大業九年の正月元旦、其の年の秋、大業十年、弟の王勃が官を罷めて帰ってきてのち[10]、またこの鏡をもって放浪の旅に出る。その後は旅する場所の先後にしたがって叙述される。大業十三年になると、鏡は作者のもとへ還り、七月十五日に飛び去り、どこへ行ったかわからずに終る。こんな風であるが、もう一方では、六朝小説式の排列方法によらず、一般の小説のような書き方、つまり年月順に排列せず、一挙に書きおろすという方法もとっている。だから、私は、古鏡記には特記すべき形式上の三つの特質があると考えている。

（一）この作品の表現しようとするのは、古鏡の霊験で、作品の主役は、古鏡である。作者は、すべての精力をこの対象に集中させている。これは六朝小説にくらべて大きな進歩である。

（二）古鏡記はまだ構造をもってはいないし、プロットもいいかげんであるが、エピソードの排列法は、もはや直線式ではなく、各々殿落ができ、つらなりあって、一篇の作品にまとまり、首尾は呼応している。各々の殿落の結合の仕方は機械的であり、計画的に組み合わされてはいないけれども。

（三）小説の冒頭にきわめて短い導入部分があり、主人公の古鏡について紹介している。これはまともな小説において、読者に与えられる時間的・空間的説明と同じ効果をもっている。又、小説の末尾にも古鏡の落ちつき先について説明を加え、読者に一つの結末を示している。これは近代小説の一つの主要な条件である。だから古鏡記は、内容、形式の両面で時代のつなぎ目の役割を十分に果し、また中国小説の展開のさまをたどるのに、見やすい指標となっているのである。

第二節　古鏡のもつ意味及び作者の創作動機について

様々な古代の記戒から見ると、鏡はもともと民間の迷信では、魔よけ、護身用のおまもりと考えられていた。葛洪の〈西京雑記〉に次のような記戒がある。

「漢の宣帝は郡の獄に繋がれていた時、腕に史良娣の五色の美しい糸をかけ、それにインド産の宝鏡を一つ結びつけていた。その鏡は大きさは八銖銭[11]ほどの大きさであった。昔の伝説ではこの鏡は化け物を見わける能力があり、これを身につければ、天神の祝福を受ける。……帝はこれをいつも琥珀の箱にいれ、戚里で作った錦の布で包んでおいた。帝が死ぬと、その鏡はどこかへなくなった」このような護身、魔よけの観念は古鏡記のなかでは、きわめて明瞭に表現されていて、しかも主要な成分となっている。作者の弟の王勃が放浪の旅に出ようとする時、作者に鏡を借りたのも、それを魔よけにするためだったのである。またこの種の鏡は大方、身に帯びるものであった。裴鉶作の崑崙奴では、ヒロインの紅綃が崔生を庭に送り出した時の描写に「別れぎわに三本の指を出し、掌を三度返し、その後、胸の小鏡を指さして、『おぼえておいてね』と云った」とある。[12] この鏡は明らかにいつも胸の前にぶらさげて魔よけにしていたものであり、相手に自分を憶えさせるために前もって準備しておいたものでないことは明白である。こうして、鏡は神話と迷信の中の重要な役割をもっていたのだが道教で染め上げられて、意味深げな、超能力をもつ霊物になりあがったのである。柳宗元の〈竜城録〉に次のような記戒がある。

「長安の任中宣の家に『飛精』とよばれる宝鏡があった。識者はこれを三代以前の物を称している。鏡には巧みな箔篆[13]で『水銀の珍精を百たび錬って作った鏡』と書いてある。鏡の出所を訊ねると、商山の樵が石の下で見つけたということだ。その後、中宣が南方の洞庭へ舟で行ったとき、風浪の音が激しい夜、舟上で寝ていると、夢に一人の赤衣の道士が竜に乗って現われ、中宣に、『この鏡は竜宮の秘宝であり、人の世に在る期限が来た、だから私に返しなさい。』と云う。中宣が、名前を問うたが、笑って答えず、鏡をもって去った。目が覚めて鏡の箱をしらべてみると、もうなくなっていた。」

大平広記二三〇の〈蘇威伝〉には

「隋の僕射の蘇威は、すばらしく精巧な鏡を持っていた。その鏡は日蝕・月触の時には光が失せ、何も映らなくなる。威ははじめ、家来の者が、この鏡を汚していたので、気づかなかったのであるが、ある日、月蝕で月が半分欠けた時、鏡も半分だけ暗くなったの

で、それからは宝物として大切にした。その後、鏡の箱の中から雷のような声がしたのでしらべてみると、鏡の出した音であった。間もなく、子の瓊が死んだ。次に音がしたあと威が戦に敗れた。のち鏡は行方知れずになった」この二つの物語と古鏡記は枠組みが似ている。たゞし、古鏡記では、鏡は最初蘇綽のところにあったが、のち侯生の手にわたり、侯生が死に臨んでまた古鏡記の作者につたわることになっている。作者は侯生の古鏡についての解説という形で次のように言っている。

「昔、私は黄帝が十五個の鏡を鋳たと聞いた、第一の鏡は直径一尺五寸で満月の数にあたる。それから一寸づつちいさくなり、これはその八番目のものだ」

「蘇綽は物事に精通した人物で、易にも深く通じている。過去・未来に精通し、勘にむかって、『天下の神秘な宝は、人の世にいつまでも止まってはいない。今は世界が大いに乱れているので、貴公は他郷にいつまでもいるのはよくない。この鏡のあるうちに、その神通力の加護のもとに、一刻も早く故郷へお帰りなさい』……」

ここでも言われているように、この鏡は、唯の護身用の魔よけだけでなく、世道、治乱、人物の盛衰などとも反応するのである。古鏡記の中にある題材は、何も新しい材料ではなく、神話・迷信や道教の信仰の中の鏡に関する一切の伝説や理論を一つに集めて、一篇の物語を作りあげたのだと云えよう。

鏡の含意は以上述べた通りである、それでは作者は関係資料をみな集めてきて、古鏡記を作ったが、彼の動機をやはり六朝の普通の筆記体小説の如く、ただ機械的にエピソードを記録したにすぎないのであろうか。それとも作者にはもっと深く、大きな動機があったのだろうか？古鏡にまつわる事件は大業七年五月の侯生の死にはじまり、大業十三年七月十五日に終っている。この間に作者は、しばしば世道が混乱し、鏡が人間界にとどまれないことになる様を暗示する。鏡が飛び去ってゆく時に、作者は極めて感動的な描写をする。

「突然、鏡の箱の中で悲鳴がおこった。その声は細くかすかだったが、次第に大きくなり竜虎の咆哮の如くであった。その声がようやくおさまって、箱をひらいてみると、鏡はなくなっていた」

これはまさしく大業十三年七月十五日であった。時に天下大いに乱れ、豪雄割拠の状況がすでにでき上っていた。この年の十一月、煬帝は江都で殺され、隋王朝はもはや挽回する勢はなくなっていたのである。作者はまた、約生が蘇綽を追憶して語る語をかりて次の如く言っている。

「蘇公はおっしゃいました。『わしが死んで十余年すれば、我が家はこの鏡を失い、その所在は知れなくなろう。だがこの鏡は天地間の霊物であるから、その動静には徴（しるし）があるはず、今、河汾のあたりに、しきりに宝の気が現われ、わしの卦と符合する。鏡は恐らくあそこへ行くであろう』」と、又その卦の詳細を述べ、「『まず侯の家に入り、そこから王氏（即ち作者）、それ以後は行方がわからなくなる』」と言っている。

まさにこの時期、中原では豪雄が並びたち誰が鹿（天下）を手に入れるかまだはっきりしていなかった。作者が古鏡の未来の主人が誰になるのかがわからずに嘆く気持はよくわかる。だからこれによって作者が古鏡記を書いた時代を推定することができる。それは大業十三年の七月十五日以後から唐の武徳の初めまでの、唐王朝の基礎がまだ十分にはっきりと定まる以前であるにちがいない。そして作者の主要な動機はおそらくは、怪を誌すことにとどまるのではなく、小説をかりて、興亡盛衰の感想を述べようとしたものであろ

う。[14]

註

(1) 古鏡記の著者については定説がない。以下諸説のあらましを述べる。

① 王度説、〈太平広記〉〈太平御覧〉〈戒氏広異記序〉〈文苑英華〉等の記述に基く。

② 王凝説、王度なる人物が歴史書に登場しないことから、王度は王凝ではないかとする説、(魯迅〈中国小説史略〉)その他。

③ 王凝以外の人物に仮托した可能性を述べる説(汪辟疆〈唐人小説〉)

④ 王度実在説、王度を王通・王勃・王静等の兄にあたる芮城府君と呼ばれる人物とする。(孫望〈王度考〉'62学習月刊)

⑤ ④を否定し、王度は王氏一族中の王勔なる人物とする。(段仲熙、〈古鏡記的作者及其他〉'62・文学遺産十輯)この説には劉大杰も同意している。(〈中国文学発展史〉新版)

⑥ 王夢鷗氏は②を大筋において認めながら、顧況の〈戒孚広異記序〉の記述に王度を唐代の人としている点と、作中の記述との矛盾を指摘する。(〈陳翰異聞集考異〉唐人小説研究二集)

以上が中国・台湾における諸説の概略である。

⑦ 内山知也氏は、小説中の事件と、王氏一族の唐代での境遇を考慮し、又道教的背景から、作者を唐王朝に批判的な道教者で、王一族に属する人物と推定する。(〈古鏡記について〉前掲書)

⑧ 近藤春雄氏は、小説内部の不統一に注目し王度の原作に後人の手が加わって、現存の作が成立したのではないか、という仮説を提示する。(〈神怪小説〉前掲前)

(2) 本文では新唐書となっているが正しくは旧唐書。

(3) この点について、古鏡記を印度思想の影響によって作られたとする説(霍世休〈唐代伝奇印度故事〉文学、二巻六号)がある。

(4) 括弧内の部分は新版によって補った。

(5) 餐性とは道家の修養の一つで、自然に与えられた性をそのまゝ養うこと。服食とは道家の養性法の一つで、丹薬を服用すること。

(6) 安期は秦代瑯阪(ろうや)阜県の人、仙人、始皇帝と三晩にわたって語りあい、数万の金帛を受けたが、捨て去り「千歳ののちに蓬萊山で逢おう」と書きのこした。彭祖は古代の仙人帝顓頊(せんぎょく)の孫、七百歳生きたと伝えられる。

(7) 本文は新唐書とするが正しくは旧唐書。

(8) 八卦は乾(けん)兌(だ)離(り)震(しん)巽(そん)坎(かん)艮(ごん)坤(こん)の八種、十二辰は十二支のこと。

(9) 周髀算経は、二巻、古代の天文書。明堂六甲は、呪術的な建築に関する書。

(10) 本文では大業十年、大業十三年夏八月となっているが、新版によって改めた。

(11) 秦代の銭、重さが八銖(約5.4グラム)あるのでそうよんだ。

(12) この部分は本文では『然後指胸前的一鏡為記……』となっているが、伝奇の本文は『然後指胸前小鏡子、云々「記取」……』(張友鶴選注、〈唐宗伝奇選〉'79人民文学出版社)である。この場合は、後者によって訳出した。

(13) 周の太史籀が作った漢字の書体の一つ。

(14) 結論の部分は新版では大きく変っている。重要な箇所なので訳出して付録とする。

……換言すれば、古鏡記の主題思想の表現する作者の世界観とは何であろうか?……まさにこの時期に、中原では群雄ならび起ち、天下が誰の手に落ちるかがわからない時であり、作者の、古鏡の未来の主人が誰になるかがわからないことを嘆く気持はよくわかる。このことから作者が古鏡記を書いたのは大業十三年(AD617)七月十五日より後で、唐の武徳のはじめ(AD618)であり、この時期は唐の政権の基礎はまだ十分に定まっていないころであろうと推定される。作者の主要な動機は多分、単に「怪を志す」ことではなく、きわめて悲痛な気持で隋王朝が政権を失ったことも悼

んでいるのである。「箱の中で悲鳴がおこり……鏡はなくなった」はその表現であり、もう一方では、どんな勢力が力をつけてきて、政権を奪取するのかをうかがっているのである。古鏡が霊現であることからこれを主役とし、当時の政治的大変遷を反映させたのである。例えば古鏡がもと蘇綽の家にあり、蘇綽は北周の宇文泰の重臣で、彼が死ぬ時に占いをたてて言う。「おれはもうすぐ死ぬのだが、この鏡は誰の手に渡るのやら」「おれが死んで十年ほどすると、我が家から此の鏡は失せて、どこかへ行く」さらに詳しくその卦を「まず侯の家に入り、それから王氏のところへ行く……」隋の大業十三年七月十五日に鏡は王度の家でなくなるのである。王家で鏡がなくなることは、隋の王室が滅亡に向うことを暗示する。作者は又古鏡に特殊な性格を賦與し、そのおちつく先の家はどうやらある種の選択がなされているようだ。選ばれるのは、徳のあり、盛んになる家で、棄てられるのは、滅亡にむかっている家なのである。その外に、作者は民間の苦しみに痛切な同情をよせている。例えば「天下は大いに飢え、庶民は病んだ。蒲陜のあたり（陜西省）には疫病が甚だ流行した。河北の張竜駒なる人が、度の下役人となっていたが、彼の家の良民も賤民も数十人が同時に病気になった。度はこれを憫れんで、その鏡をもって彼の家に入り、竜駒に夜に鏡で照らさせた。……すぐに熱はおさまり、夜中にはなおった。鏡にとって何の害もなく、多くの人々を救うことができたので、これをひそかにたずさえて、庶民のところを巡った」とある。この文章は、一方でははっきりと、当時の人民が飢餓と疫病に悩まされている惨状を反映し、同時に作者も自己の立場をあらわにしている。

以上述べたのは、この作品のリアリステックな部分である。即ち、思想的には、当時の政治的混乱を反映した人民の苦しみ、及び作者の当時の政治と社会に対する見方と態度なのである。それは或程度の素朴な唯物論的因素を含んでいる。彼（作者）の見方からすれば、客観世界はすでに変化しつつあり、静止したまゝではないのである。

しかし、作者の世界観は、基本的にはまだ魏晋南北朝以来流行の老荘思想を脱けきっていない。だからこの作品にはまだ濃厚な宿命論的な意味がある。どうしようもない問題に出合うと、すぐに傍観者的態度をとり、一切の問題を「天命」に帰してしまい、情況に対して妥協又は降参の態度をとる。例えば作者は、鸚鵡（婢の名）が、思いのたけを尽し、大いに酔って立ち上って舞うのにことよせて、「宝鏡よ宝鏡よ、哀しいかなわが運命、我が身を離れてより、幾歳経たる、生くるは楽しと雖ども、死も亦た悲しからず、何ぞ恋々として、この生に執着せん」と言わせているし、又、古鏡の精が夜中に夢に托して次の如く言う。「王どのにこう伝えよ『人民に罪があり（思うにこれは支配階級の作り出した禍であり一般庶民に罪があるわけではない）天がこの災いを下されたのだ、どうして私が天に逆らって人を救えるものか……」この一段は作者の宿命論思想を表現しているが、われわれは、彼が善悪是非に対してきわめてはっきりした基準をもっていることもわかるのである。古鏡はどんな人物の病気でも治すわけではなく、罪ある者は治さないという原則がある。作者は社会における黒暗を、人民に罪がある故だと見なし、彼等が苦しむのは罪があるからなのだとする。作者は人民と支配階級両者間の境界をはっきりと区分していない。しかしこれは歴史的な条件の制約であり、我々は、唐時代の作者に、階級的観点によって問題を分析せよと要求することはできない。

第一の例は、鸚鵡が臨終の前にひたすら「数刻の命をいただき、一生の歓びをつくしたい」とのぞみ、しばしの快楽の時ののちに何のこだわりもなく死の運命をうけいれ、すこしも逃げかくれしようとしないこと、第二の例は、作者が人民の苦しみの原因をつきとめようとせず、簡単に「天命」ということにしてしまうことである。これはまさに、魏晋以来数百年の戦争の生活を反映し、人々の頭の中につくられた一種のただ束の間の快をむさぼるまた悲運をさからわず甘受する。消極的・悲観的で、運命の支配に何の抵抗もせずにうけいれるという宿命論的思想意識であって、これは初唐以後の人々の、澄澈たる反抗精神とはまったく異なるものである。

総じて、この小説の中国小説発展史の中での地位は偉大である。即ち、六朝小説の単純な志怪、記異の基礎の上に、小説に現実の中の政治的衝突を反映させ、また小説を人民の平和な生活を求め、幸福な生活へのあこがれを表明するまでに発展させたこと、とりわけ、古鏡を通じて病をなおし、魔物をのぞき、人民の苦しみに関心をしめしていることは評価に値いする。しかし、天に反して人を救うことには反対するという、作者自身の一定の立場と態度は、あまり立派だとは言えない。かくしてこの作品を伝奇小説の最初の一篇とする次第である。

第三節　補江総白猿伝の成立由来分析

この小説の成立の由来、その可能性については歴代の批評家達、晁公武、銭侗、陳振孫、胡応麟などの人々が、詳細に論じつくしている。おおかたの意見は、欧陽詢の容貌が猿のように醜く、好事家又は彼の敵が一篇の白猿伝を作って彼を嘲笑したのだというものである。その人々の根拠にしたのは、次の記載である。孟啓の〈本事詩〉（嘲笑第七）「国初に長孫太尉（名は無忌・太宗文徳皇后の弟）が欧陽詢（卒更の役）の容貌の醜いのを見て、これを嘲って、『肩の肉は肥えそびえて山なりになり、頭は肩に埋まっておそるおそるのぞく、こんな猿野郎を麒麟閣に画こうなど、誰が言い出すものか』（思うに太宗が功臣を凌煙閣に描かせたのは貞観十七年であり、欧陽詢は十五年に死んでいるのでこの時は議論されただけで実際には画かれなかったのかもしれない、はっきりしない）詢はこれに対し『辨髪は背中に垂れさがって暖かく、ダブダブズボンは腹の冷えぬため、（無忌が漢人でなく胡人であることを嘲ったもの）心は混混と乱れるので、顔は団々と丸くなる』太宗はこれを聞いて笑って言った。『詢はこんなことを言うが、皇后がこわくはないのかな？』（皇后は貞観十年に死んでいるので時間的には合わない、或いは孟啓の記憶ちがいかもしれない）」

欧陽詢の顔が醜くかったことは事実らしく、両唐書の伝には同じような記載がある。新唐書二八九の本伝では「欧陽詢は……陳の大司空頠の孫、父は紇、陳の広州の刺史だったが、謀叛のかどで誅せられ、詢も連坐させられかけたが、辛うじて免れた。陳の尚書令江総が紇と親しかったので、詢をひきとって学問を教えた。詢は容貌はたいへん醜くかったが、きわめて聡明であった。」とある。又当時の士大夫はお互いにからかいあうのを楽しみとしていたので、欧陽詢が他人から嘲弄の対象とされたり、猿とよばれたりすることは、あり得た。欧陽詢の方もまけていないでやり返していた。例えば太平広記巻二五四の〈啓顔録〉には、彼が蕭瑀を嘲った詩が載っている。

「唐の宋国公蕭瑀は弓ができなかった。九月九日に天子の命令で弓を射たが、彼の矢は一本も的までとどかなかった。欧陽詢はこれを次のような詩に詠んだ。「強い風が勢の弱い矢に吹きつけると、弱い手で強い弓を引く、高く飛ばそうとしても、矢は下にむき西むきに射ても東へもどり、十本とも地面に落ちた。両手はともに空を掴む、射手は誰あろう、それこそ宋公にちがいない。（宋公とは蕭瑀の封号）」」つまり蕭瑀は南朝の蕭梁の子孫であり、南人は武芸を習っていない。この詩は文弱青年の醜態、まことに切羽つまった様子を活写している。又太平広記巻四九三欧陽詢では次のように書いている。

「文徳皇后が死に（貞観十年）百官が喪に服した時、卒更令の欧陽詢の姿かたちがおそろしく醜く、衆人の指弾することとなった。中でも中書舎人の許敬宗は、その姿を見て大いに笑ったので、御史

に弾劾され、洪州司馬に左遷されてしまった。」（談賓録）

国家の喪儀はかくも厳肅なものであるから、欧陽詢の容貌を嘲笑しようとした連中は許敬宗のように官位をおとされても仕方あるまい。ところで、許敬宗やその他、損害を被った連中が、この事によって、小説を書き、彼は猿の児なのだと嘲ったのだろうか？　これは、たやすく断定できる問題ではない。文徳皇后の死は貞観十年であり、欧陽詢は貞観十五年（八十五歳）に死んでいるのであるから、もし小説のテーマが、本当に欧陽詢を嘲笑することだけにしぼられているとすれば、彼の生前に書かれねば意味がない。ところが貞観十五年より以前に、こんなに成熟した小説が産み出されるかどうかは一つの問題なのである。この件については、後節で白猿伝の技巧について述べる際に再びとりあげることにする。

白猿伝の成立には、以上述べた欧陽詢が猿に似ていることに因んで様々に付会された理由の外に、私にはもう一つ大きな成立要因が考えられる。それは社会一般にある固定観念及び迷信の存在である。例えば動物が人間を産んだり、人に化けたりすること、ことに狐が人に化けるという観念は、六朝時代にすでに流行していたし、しばしば小説の題材とされてきた。唐代になってもこの種の観念はいささかも変らなかった。彼等の信仰は、つまるところ、単に心理的なものであったり、或いはまともにこのような生理的変化を認めるものであったりするが、ともかくも、様々な階層の人々の作品中にこの種の記録が明らかに残されている。いまその幾つかを要約して示そう。六朝の作品では、例えば、干宝の搜神記・巻三　に次の話がある。

「高辛氏の時、房王が乱をおこした。高辛氏は房王の首に、賞金千斤と美女を懸賞とした。すると盤瓠という犬が房王の首を切って持ち帰ってきた。そこで高辛氏は約束通り犬を会稽侯に封じ、美女五人を下賜した。後、三男六女が産れた。男が生れる時、体は人の形をしていたが、犬の尻尾がついていた。その後子孫が栄え、その国を犬戎国と号した。現在の吐蕃は盤瓠の末裔である」（原文の大意、吐蕃の名は、唐代に入ってから盛んに用いられた。したがって末尾の部分は後人の加筆であろう。[2]）　ここでは明らかに他民族への蔑視の意識が見られる。中国の歴史を眺めてみると、外夷の名にみんな犬偏をつけている。これはそのあらわれである。又唐人の作品で顧夏の作とされる袁氏伝[3]では、

「広徳の頃、孫恪という秀才が袁氏という名の女と結婚した。この女は実は、恵幽という僧の飼っていた猿であった。開元の時に高力士がその猿の賢こさを惜しんで、宮中につれていき、皇帝に献上したのであったが、安史の乱中に、どこかへ失せたのであった。孫恪に嫁して二人の子を生んだが、フイッと本性にかえり、猿に変身すると跳んで逃げ去った。孫恪は二人の子を連れて故郷へ帰った」（要約）という話である。又張読（晩唐の人）の宣室志に、

「元和の頃、計真という者が、李外郎の娘を娶った。七男二女を生み、常人と異なるところはなかったが、年をとっても容色が衰えなかった。のち、彼女が臨終の時、自分が狐であったと告白した。死後、その死骸は狐の姿をしていた。七男二女は皆死に、その死骸は人間の姿のまゝであった」（要約）とある。

このような記録からすると、白猿伝の作者はただ単に嘲笑だけを目的としたのではなく、当時、確実に存在した固有の観念を背景として、社会一般の読者の信仰をとりこんだのである。

第四節　白猿伝の唐代伝奇小説における位置、及び成立年代の推測

白猿伝の作者は、江総の白猿伝を補作したと称しているが、これは仮托の言である。唐代の歴史では欧陽紇は謀叛して陳の武帝に殺され、彼の子欧陽詢は江総にひきとられて成人した。（上節参照）作者は江総の作はすでに佚し、自分がそれを補ったと偽って、作品の権威ずけをし、又他人には作品に根拠があることを信じさせようとした。胡応麟氏が、「詢を誣るだけでなく、総をも誣ている」と評したのは正にその通りである。現代の目で見れば白猿が人間を産むなどということは生理的に不可能であり、江総が白猿伝を書くわけがないことも、物のわかった人なら、多弁を要せずに理解し得る事である。

ところで、白猿伝は、芸術的価値の偉大な作で、中国小説史上はじめて実った果実、近代短篇小説の主要な条件を具備した最初の作品なのである。この作品は、古鏡記がなしとげなかった任務を完成した。つまり、古鏡記の獲得した芸術的進歩の上に、きわめて厳密な構成とプロットをもっているのである。だからこの作品は、直線的な記録式の小説から離脱し、しっかりした構造をもった芸術作品として最初のものなのであり、小説史上の一大進歩であると言わざるを得ない。文体上では、作者の古文は非常にスッキリと美しく、筆づかいの巧みさは、のちの古文家にいささかもヒケをとらない。プロットにおける技術もきわめて円滑で巧妙である。そして、近代小説と同様に、まず妻を失うところから説き起し、読者に、物語の背景を知らせておき、のちに欧陽紇の追跡、婦人達と相談づくで白猿を殺す場面を述べる。この場面はきわめて緊張に富んでいる。白猿は危難に臨んで、

「これは天がわしを殺すのだ、お前のせいではない、しかしお前の妻はすでに孕んでいるから、その子を殺してはいけない。彼は聖天子の世に必ず一族を盛んにするであろう」と云う。ここは物語中のクライマックスで、全篇の中心的部分である。作品の最後で、作者は、構成技法上空前の技巧を見せる。それは、白猿が死んだのちに、婦人たちの口を借りて、白猿の日常生活とその性格を語らせることによって物語の小説的性格を強め、作者の構造上の本領がはっきりとあらわされていることである。この点において、古鏡江に比較して大きな進歩があったことはたしかである。この作が、本格小説であると称されるゆえんはここにある。だが、この作品は二つの点において、やはり伝奇小説の前駆的作品なのである。

㈠　やはり六朝小説的色彩があり、全篇の雰囲気は怪談風、人物も地についていないし、社会生活の深刻な反映は見られない。この点は作者の罪ではなく、時代のせいである。小説が現実生活を反映するようになるのは、大よそ、安史の乱以降のことである。もし白猿伝を全盛期の古文運動の時期につくられた小説と比較してみれば、その差は一目瞭然である。

㈡　構成上にまだちょっとした欠陥がある。物語の主人公が不明確なのだ。言いかえれば話の中心が事件に偏してしまい、人物や性格が軽く扱われ、主人公の白猿の位置があやふやなのである。作者は欧陽紇の役割にも重きをおきつつ、また「白猿が子を生む」ことにも重点をおいている。このように見てくると作者の作品構成技巧はまだ十分なものでないことが現われてくる。これを後世の他人を批判した作品李娃伝などと較べてみるならば、いろいろな点でどうしても見劣りがしてこよう。しかし、白猿を刺殺する場面はきわめて生き生きとしていて作者の描写技巧の冴えを見せるのに十分であ

る。更に白猿の生活について、短い言葉であっさり描きつつ、白猿の個性を真に迫って描き切っているのも、作者の芸術的能力の高さを示すものである。

おわりに白猿伝の成立年代について考えてみよう。[4] これまでの議論でこの問題の解決について、いささか役に立つのは、作品の成熟度と創作技法からして、この作品は多分それほど初期の産物でないらしいという推定ができることだ。なぜならば作者はどうしても、彼の生きた時代の制約をうけ、それとかけ離れることは不可能だからである。彼はおおかた初盛唐の頃、つまり高宗・武后の頃に生れたはずとするのが理にかなっているだろう。[5] もちろんこれは直接的証拠のない架空の推測にすぎない。白猿伝という作品の産出を刺激する直接的な要因を見出すことができない以上、その成立年代について明確な結論を下すことはできない。ここで、私が偶然目にした一つの記載を以下に記録し、後日の研究の参考に供しようと思う。

柳宗元の〈竜城録〉中の（武居常）の条に、（原註）

「武居常は天后（則天武后）の高祖（五世の祖）である。若い時洛水の下流で遊んだ。彼は人から猴頻郎と呼ばれた。居常の頤の下に猿のような鬚が生えていたからだ……。」

武后は権力を握っていた時、多くの人に恨まれたから、もしかすると、欧陽詢にことよせて、武后の悪口を言うことも、絶対ないとは言えない。又、欧陽詢の息子の欧陽通は、武后の時、武后に反対して殺されている。もし、好事家や、彼の敵対者があって、何かの原因で彼の父親に関する伝説を穿鑿し、附会し、小説につくり上げ、彼を白猿の子孫と罵ることだってないとは言えない。この二つの仮定はともに個人的な推測であり、参考のために付記した。

（原註）竜城録は旧本が柳宗元撰となっているが、宋の葛嶠が柳の文集から編集したもの、唐書芸文志はその名を載せない。何薳の春諧紀聞には宋の王銍の偽作であるとする。朱子語録にも「柳宗元文集の後にある竜城録は王銍の作である」とある。その理由は、どうやら、その文が、怪異不正のことを書いていて柳宗元の語調とあっていないということらしい。こういう理由は、主観的に過ぎるので根拠とならない。

註

（1）率更は漢代以降、水時計を司る官吏、陽詢の書体を率更体と言うのは、彼がこの職にあったからである。

（2）この話は八巻本拠神記によっている。二〇巻本では若干ちがう話になっている（巻一四所収）。

（3）袁氏伝は、太平広記巻四四五に孫恪という題ででてくる。出典は「伝奇」。著者は恐らく明代の鈔本から著者を顧窗としたのだろうが、正しくは裴鉶である。

（4）白猿伝の成立についての諸説の概略を述べる。

①　欧陽詢の容貌が猿に似ていることをそしったもの、とする説〈本事詩〉その他にもとずく、欧陽詢に個人的な怨恨をもつ人物がいてそのモティーフを小説化したと考える。（魯迅〈中国小説史略〉）

②　猿が人間の女をさらって子を生ませるという民間伝説や、人民を困らせている妖怪を退治する話などの変型として白猿伝を位置づける説（劉葉秋〈略談〉〝補江総白猿伝〟及与其有関的故事「古典小説論叢」'59・中華書局）（成行正夫〈白猿伝の系譜〉'74・芸文研究33）

③　①と②の両者を統一的にとらえ、①のモテーフを怨恨でなく遊戯的なものととり、②の要素にインドや西欧の民間伝説（ラーマ・ヤナ・ニューベルンゲンの歌）などとの共通性を指摘する説（李長之〈中国文学史略稿〉'55）

④　民間の白猿伝説の分析、白猿伝の内容の史実との比較検討を通じて、この作品を、六朝志怪から中唐伝奇への過渡的作品とする見方

（本書の劉開栄氏の説）を否定し、物語構成において統一性を欠いた失敗作と見る説（内山知也〈「補江総白猿伝」について〉前掲書）

⑤（張長弓〈唐宋伝奇作者暨其時代〉'51商務印書館）の説にもとづいて、この作品の成立年代を中唐以後とする説（近藤春雄〈補江総白猿伝〉前掲書）

⑥ 白猿伝の出典が太平広記に「続江氏伝」とあるところから、作者を江総の第一子である江澄であると推定する。その根拠として、欧陽詢が唐代になって出世し、江の家が没落した事実に加えて、①自分が幼時から軽蔑していた陽詢が醜い容貌であり、②彼が被養育者として恩義を感じていないことに憤り、③自分の文才に自信があって、この作品を作ったとする説（王夢鷗〈間話「補江総白猿伝」〉唐人小説研究四集、下編 '78芸文印書館）

（5） 以下は新版では削除されている。新版では次の文がつづく。

たゞこの作品は著者の姓名を書いていないし、考証の資料とたいへんすくないので、この意見は一つの推測であり、定説では決してない。ただ唐人は作品に他人の名前を偽ってつけたり、小説で他人を罵ったりするのが好きで、よくそういうことをする。この作の中心的思想は「白猿が人間を生む」ということに重きを置いているようであり、白猿が死に臨んで「これは天が私を殺すのであって、お前がやるのではない。たゞお前の妻は孕んでいるから、その子を殺すなよ、聖天子の御代になれば、必ず一族が栄えるからな」と言っていることからすると、どうやら当時の朝廷で枢要の地位にある人物を白猿の子として罵っている可能性がつよい。ではこの作者はなぜあからさまに言えず、こんなに曲折した形でしか、自分の権力者への憎しみを表現できなかったのであろうか？この作品の社会の暗黒面の暴露はさほど多くなく、不明確であるが、権勢家への憎悪と諷刺という点では、ある程度の現実的な意義がある。これ以外に、この作品の価値で重要なのは、やはり前述したような、小説形式の発展のプロセスの中での描写技巧の進歩および、その小説史上の位置、ということになろう。